

聖書の学び／2001年

桑 栄 一

- 1月1日(神の母聖マリア) “神の母”となられた聖マリアは、今朝の朗読聖書の中の最も重要な登場人物であります。しかし、彼女は決して降誕の出来事の主人公ではなかったことを、私たちは忘れてはなりません。……今日の祭日にその聖マリアから私たちは、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じる」(ルカ1:45)ことを学びます。救済史を導き給うイスラエルの神に賛美！
- 1月28日(年間第4主日) 福音を語ることはいつも、会衆自身の罪を語ることと表裏の関係にあるものです。イエス・キリストの救いは罪と死からの救いであり、私たちはその罪と死の淵からキリストの十字架のいけにえによって贖い出されました。罪とそれに対する神の裁きとは、決して縁遠い事柄ではなくて、まさに私たち自身に関わるものであり、キリストの救いはその罪と死の中からの救いでありました。
- 2月4日(年間第5主日) 神の子イエス・キリストの前に出るということは、罪の告白と“主よ、憐れんでください”という祈りが直ちにそれに続くものであることを、ルカ福音書の読者である初代教会の会衆たちはよく知っていました。私たちの主日のミサの中心に来てくださる方は“先生イエス”ではなくて“復活のキリスト”であります。私たちは罪の赦しを与えてくださるイエス・キリストを通して父なる神の御前にミサをささげます。
- 2月25日(年間第8主日) ミサは、イエス・キリストに救われた会衆が集まって、共にささげる神奉仕であると言われて来ました。“神奉仕(Gottesdienst)”という用語は二重の意味を持っています。言うまでもなくその第一は、父なる神がその独り子イエス・キリストの十字架の救いによって私たちに奉仕して下さったことであって、その御業について聞き、十字架の奉献を記念することがミサの最も大切な内容であります。この“神の奉仕”と固く結びついているのが、私たち会衆の“神への奉仕”です。すべてのキリスト者は教会の頭であるキリストの祭司の務めに与かって、その奉献に一つに結ばれて、神への奉仕をささげます。
- 3月18日(四旬節第3主日) 私たちにとって、受難と復活の主イエス・キリストはかけがえのない救い主です。私たちが主日のミサでそのいけにえを記念するキリストは、昔も今も変わらない同じキリストです。その同じキリストが、やがて教会に神の国を受け継がせてくださいます。ミサの祭儀は私たちキリスト者の生活全体の中心であって、その中に神の働きの頂点があり、その中に私たちの礼拝の頂点があります(ミサ典礼書の総則1)。ですから私たちは、真に悔い改めたいと願うなら、ミサを大切にしましょう。
- 4月1日(四旬節第5主日) 主イエス・キリストがその受難と復活によって成就された救いの業は、終末の裁きからの救いです。復活によって「生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた」(使10:42)イエスは、同時に「来たるべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエス」(1テサ1:10)なのです。終末の日にすべての人々への裁きが確かに来るように、その裁きからのイエス・キリストによる救いも確かに終末の日に実現するのです。
- 4月15日(復活の主日) コロ3:3-4「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」私たちキリスト者の復活の完成は、まだ将来に残されています。そのことはキリストが現れる“最後の日”までは起こらないのです。主イエス・キリストの復活は、私たちすべてのキリスト者の復活の希望の支えです。
- 4月29日(復活節第3主日) キリスト教会は使徒たちの宣教から始まったのだということを、私たちはよく理解する必要があります。イエス・キリストは復活の後その弟子たちに現れて、御自分の死と復活によって

成就された救いの福音を示されました。使徒たちが宣教することによって最初の教会が誕生し歩み始めた、その使徒たちの宣教は、彼らが自分自身で考え出したものではありませんでした。そうではなくて、彼らに現れた復活のキリストが、その十字架と復活の出来事は人間に罪の赦しを与える神の偉大な贖いの御業であったということを理解させたのでした。復活のキリストが彼らに現れてくださったということ、その経験が彼らに福音を理解させ、彼らを大胆な福音宣教者に変えたのでした。

5月20日(復活節第6主日) 今朝の朗読聖書から私たちが理解できる「平和」とは、ミサ、特にその中の“感謝の典礼”を通して復活のキリストが与えてくださる平和です。それは人間が作り出すようなものでも、この世が与えてくれるようなものでもありません。そして黙示録が「新しい天と新しい地」と説明している神の国の到来する日に、「全能者である神(御父)、主と小羊(御子イエス・キリスト)とが」(黙 21:22) 私たちとの間に持ってください「平和」こそ、まさに主イエス・キリストがミサを通して与えてくださる平和なのです。

5月27日(主の昇天) その20世紀の教会が抱えていた問題の中の 하나가、「また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」(9:27) という聖書の言葉を、使徒的証言、使徒的宣教の本質的な一部として誠実に受け入れることをしなかったという点です。死は神の裁きであること、死は神に見捨てられ取り去られることなのだということを、20世紀の多くのキリスト者は決して認めようとしませんでした。しかし、主イエス・キリストがその受難によって私たちに代わって負ってくださったのは、正に“神に見捨てられること”だったのでした。

6月24日(洗礼者ヨハネの誕生) 主イエス・キリストの復活と昇天を経て、使徒たちによって「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」(ルカ 24:47) ようになりました。そして21世紀を迎えた現代の教会も、使徒継承によって“悔い改めと罪の赦しの宣教”を確かに受け継いで来ているのです。…… 救いは人間が作り出すものではありません。洗礼者ヨハネや初代教会の使徒たちがそうであったように、すべての宣教者たちはいつの時代にも“罪の赦しによる救い”を与えてくださる主イエス・キリストを証して来ました。

7月1日(年間第13主日) (原始)教会の宣教はすべての人々を対象にして進められ、いろいろな種類の人たちがミサには集まって来ていました。「人間をとる漁師」(マコ 1:17)として召された教会の働き人たちには、その獲物を選択することは求められていませんでした。現在は招きの時代であって裁きの時代ではないからです。しかしそれは、神の国は終末の裁きと共に来るのだという緊迫感を忘れても良いということではありませんでした。20世紀のキリスト教が意図的に退けて来た裁き主イエスの到来のメッセージを、私たちは再び聞くことによって21世紀の教会を造り上げて行かねばなりません。

7月8日(年間第14主日) 他方、ユダヤ教から分離する形で誕生したキリスト教会は、地上のエルサレムではなくて天上のエルサレム、神の国に希望を置く信仰によってその歩みを始めました。ですからこの同じイザヤ書の預言によって、私たちキリスト教会は神の国での礼拝の完成に向かって目を上げるのです。v.13「母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける。」この慰めは神の国で完成するのです。私たちが地上のミサで受ける慰めは、この神の国の慰めの信仰による先取りに他なりません。

8月12日(年間第19主日) キリスト教会が代々にわたって受け継いで来た“信仰”とは、神の国を待望する(ヘブ 11:16)復活の信仰(ヘブ 11:19)です。いつの時代にも教会は、キリストが過越の小羊として屠られたことによって、私たちが神の国の民として贖われたことを記念するミサをささげて来ました。現代の私たちの教会のミサも全く同様です。主キリストの再臨の日まで、教会は「地上ではよそ者であり、仮住まいの者」(ヘブ 11:13)としての旅を続けて行きます。

8月19日(年間第20主日) 20世紀のキリスト教が意図的に無視し、決して真面目に受け止めようとしなかった主イエスの言葉がここにあります。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」(ルカ

12:49) それ終末の“裁きの火”を指していることは、全く疑いの余地がありません。……主イエス・キリストへの信仰の有無によって、救われる人々と滅ぼされる人々という二種類の間が区別されるということを覆い隠すことに、20世紀の教会は熱心でありました。

9月30日(年間第26主日) 来世とは、再臨のキリストによる終末の裁き(IIテサ2:8)と、神の国の栄光の実現(IIテモ4:1、テト2:13)のことです。福音書は、主イエスが語られた神の国の到来の危機についての教えを保存することによって、代々の教会がその警告を聞き続けることが出来るようにしました。それが教会の宣教するキリストの福音の重要な要素だからです。誤解してならないのは、このような物語りは地獄で燃える炎の有様や、天国の様子についての情報資料ではないということです。だれもそこに行って見て来た人などいないのです。そうではなくて、「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ」(IIテモ4:1)、教会がキリストの福音に耳を傾けることを呼びかけているのです。

10月21日(年間第29主日) “ことばの典礼”は“感謝の典礼”と並んでミサの中心の一つです。公の祈りであるミサには一つの中心ではなくて二つの中心があるのです。このように“祈り”が“福音の宣教”と固く結びついていることを理解しましょう。“祈り”が公のものであれ個人的なものであれ、“福音の宣教”から切り離されて主観的、人間的、世俗的なものになってしまうことは、教会にとっても信者一人一人にとっても危険なこと、教会共同体の崩壊に通じることだからです。

11月11日(年間第32主日) 復活はそれがあつかないかという仕方論で論じる問題ではありません。そうではなくて、その希望の信仰によって生きているか否かが問われている事柄なのです。私たちは洗礼の秘跡によって「キリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」(ロマ6:4)そしてこの「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」(ロマ5:5)

11月25日(王であるキリスト) 民衆、議員、兵士たちは、“救い”とは人が現在自分に迫っている危機から脱出し、解放されることだと理解していました。しかしイエスと共に十字架にかけられていた犯罪人の一人は、それとは別の種類の救いを約束されたのでした。十字架と復活のイエスが王である国…すなわち神の国…に受け入れられること、神の国の栄光を受け継ぐようになること、それこそが救いなのだということを、ルカ福音書はこの挿話によって説明しているのです。死者の中から復活して、父なる神の右の座に着かれた主イエス・キリストは、やがて終末の日に出現する神の国の王として来られます。

12月2日(待降節第1主日) 私たちキリスト者は、人の子なる主イエス・キリストが来られる救いの日を待っている民です。その日のために「目を覚ましていなさい」(v.42)、「用意していなさい」(v.44)という呼びかけを、全世界の教会が今朝の福音書の朗読を通して聞いています。このようにして、新しい典礼暦の一年が今年も始まりました。典礼暦の一年は、来たり給う再臨のキリストを待つことから始まります。……それは来たり給う再臨のキリストを迎える用意を、ミサに集まる群に向かって呼びかける特別な期節であるということが出来ます。……しかし、それは信仰によってだけ出来る用意であって、世の中が変化してそのような必要を人々に感じさせる時代が来るというようなものではありません。東西文明の対立も、飢餓や貧困も、自然破壊も、その他どのようなこの世の問題も、キリストの福音の終末的使信(メッセージ)と直接に関わることはありません。私たちは福音のメッセージとこの世のメッセージとを混同してはならないのです。……このメッセージを聞くことなしに、いつの時代の教会もその典礼暦の新しい一年を歩み始めることはありませんでした。そしてこれから後も、待降節第一主日にその時代の教会は、この同じメッセージをずっと聞き続けて行くのです。主イエス・キリストが来られ、神の国が実現するその日まで。